

続 アメリカ医療の光と影 バースコントロール・終末期医療の倫理と患者の権利

李 啓充 著

＜書評者＞ 中尾久子（九州大学大学院教授・臨床看護学）

アメリカは、貧富の格差が大きく貧者は十分な医療は受けられないと聞いていても、日本人のアメリカ医療に対するあこがれは強い。李氏は、京都大学医学部を卒業後、ハーバード大学医学部准教授を経て、現在はボストンで文筆業をしており、これまでも鋭い切り口でアメリカ医療の背景を解説し、日本の医療界に示唆に富むメッセージを発信し続けてきた。

本著は5部で構成されている。第1部は「医療倫理—延命治療の中止から小児の癌治療まで」、第2部「ビル—医療と性と政治」、第3部「転換期を迎えたアメリカの医療保険制度」、第4部「医事片々（医療よもやま話）」、第5部「『患者の権利』はどこまできたか」である。第1部から第3部までは人種、宗教、価値観が多様で医療保険制度や問題解決方法が異なるアメリカの医療のあり方に関する光と影が明快に述べられている。

私が強く関心を引かれた箇所を2つだけ紹介したい。1つは「患者の自律性」（第1部）である。インフォームド・コンセントと患者の自律性の尊重が医療の本質なら、患者が望む医療を実行しないことはむしろ問題だという点である。もう1つは「皆保険実現のために静かに共闘する二人」（第3部）で、現在進行中のアメリカの動きである。

「患者の自律性」は延命治療中止の例で語られる。回復の見込みのない患者の延命治療に関して、アメリカでは中止を含めて患者の自律性を重視した医療がなされるが、日本では延命治療の継続—例えば人工呼吸器の取り外しができない状況が続いている。李氏の「もし、日本で『一度付けた人工呼吸器は絶対に外さない』と決めている学会や病院があったとしたら、その学会や病院は『私達は患者の自己決定権は一切認めません』

と宣言しているのと変わらないのだ」という主張からは、日本の終末期医療の主体が誰であるのかを強く問われていると痛感する。

「皆保険実現のための静かな共闘」は、クリントン政権が失敗した皆保険制度を実現させる試みがアメリカで静かに進んでいることである。反対の急先鋒に回った保険会社が皆保険を進める立場となり、日本が進もうとしている混合診療と逆の動きがアメリカで進んでいることに疑問を感じ、動きをもっと知りたいと思うのは私だけだろうか。

私は医療現場、保健行政、教育機関にかかわる多くの看護者にこの本を読むことをお勧めしたい。なぜなら、アメリカ医療の光と影を知ることで、日常的には気づかない日本医療の光と影の部分がコントラストとして理解できるからである。

●四六判 頁280 2009年
定価2,310円
(本体2,200円+税5%)
[ISBN978-4-260-00768-9]
医学書院刊